

ネットいじめにおける社会心理学的研究

柳 本 理 佐

問題と目的 近年注目されているいじめの形態として、‘ネットいじめ’が挙げられる。ネットいじめはスマートフォンなどの普及により広がりを見せ、我が国でも自殺者が現れるなどその被害は深刻になりつつある。ネットいじめの対策として、‘情報モラル’の向上が注目されており、近年は小中高の情報科目の中に組み込まれている。一方で、従来のいじめ研究では集団の圧力として、‘同調’がいじめを促進する要因であるといわれている。本研究では情報モラルと同調の関連性についての検討することを第1の目的とし、また、学校や家庭での教育、そして道徳性が情報モラルやネットいじめに与える影響について検討することを第2の目的とした。

方法 大学生を対象に質問紙調査を実施し、男性 211 名、女性 324 名の計 535 名（平均年齢 18.85 歳 SD 1.05）を分析対象とした。調査内容は、同調の強さの違いによるいじめ行動選択の差を検討するため、4つの異なるネットいじめの文章を最初に提示した。ひとりにつきひとつの文章それぞれ読んだ上で、ネットいじめ行為に対してどのような行動を取るか、またその行為がどの程度悪質であるか選択するよう教示した。また、独自に情報モラル尺度を作成し、5件法で質問した。また、玉田（2001）および、玉田・松田・遠藤（2004）による道徳性尺度、学校と家庭でのいじめ、ネットマナー教育の頻度についてもそれぞれ5件法で質問した。

結果と考察 χ^2 検定の結果、同調の強さの違いによる行動選択の差では有意な結果は得られなかった。情報モラルの高低による行動選択では、情報モラルの高い者の方がいじめを止める行動を選択しており、1%水準、および5%水準で有意であった。しかし、より悪質であると考えられているネットいじめの行為では情報モラルの低い者でもいじめを止める行動を選択する者は多かった。

構造方程式モデリングの結果、学校、家庭での教育は情報モラル、およびネットいじめの悪性認知に直接的な影響を与える有意な関係は見られなかった。しかし、学校、家庭教育から道徳性、情報モラル、ネットいじめ行動に対する悪質性の認知に影響を与えていた。

以上の結果から、個人の情報モラルがネットいじめの抑制に効果的であり、更に道徳性を基盤として情報モラルが育成されると示唆された。しかし、同調と情報モラルとの関連は本研究では見出すことができなかったため、更に追求する必要があると考えられる。

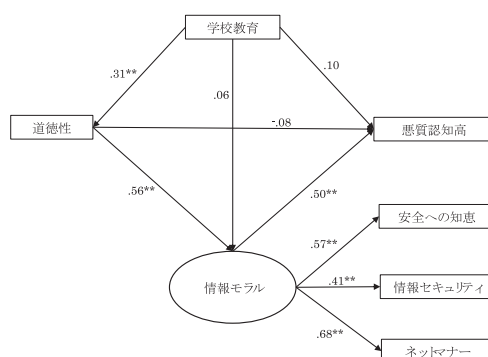


Fig. 1 学校教育がネットいじめ行動の悪質性認知に与える影響

GFI = .981, AGFI = .934, CFI = .944, RMSEA = .088